

## ポール・ファラッゾー『エミリ・ディキンソン』： 翻訳と解題

原口，遼

<https://doi.org/10.15017/1188>

---

出版情報：文學研究. 100, pp.1-37, 2003-03-31. 九州大学大学院人文科学研究院  
バージョン：  
権利関係：

# ポール・ファラッゾー 『エミリー・ディキンソン』 — 翻訳と解題

原 口 遼

[翻訳の意図] Emily Dickinson (1830~1886) は現在、アメリカ文学では Walt Whitman (1819-1892) と並ぶ巨大な詩人として認められている。私が Yale 大学にいたとき (2001年) に、高名な Harold Bloom 教授が大学院で久方ぶりにアメリカ詩の演習を担当したが、そのときの演習では、Emerson をアメリカ詩の思想的な源流として捉え、扱われた詩人たちは Emerson に続いて、Walt Whitman, Emily Dickinson, Robert Frost, Hart Crane, William Carlos Williams それに Wallace Stevens であった。これらの詩人たちが、星の数ほどもいるアメリカ詩人の中でも、現在では定番的な巨大な詩人として認められるということであろう。ここで「巨大」という意味は、とりあえず、詩のキャンノン (つまりは scope) が大きく多作である、詩が高質であり水準を保っている、詩人としての強い意識と使命感があり、長年月それに専心していたという程度の意味にしておく。

今年 (2002年) の9月末、同じく、Yale 大で、Bollingen 賞 (現代詩の分野で最高の賞で、隔年に受賞者が決まる) の過去の受賞者が一同に会して、詩の朗読会とシンポジウムがあり、会場に入り切れないほどの盛況を示したが、彼らは Richard Wilbur, W.S. Merwin, John Hollander, John Ashberry, Stanley Kunitz, Mark Strand, Gary Snyder Robert Creeley, Louise Gluck たちであった。シンポジウムのタイトルは、アメリカ詩の伝統、それにアメリカ詩の技巧であった。先に述べた Stevens, Williams, Frost ももちろん受賞者である。その他にも、Ransom, Moore, MacLeish, Auden, Bogan, Aiken, Tate, Cummings, Roethke, Shwartz, Winters, Warren, Ammons, Nemerov, Hecht, Riding といった懐かしい名前が並ぶ。

さて、ディキンソンについては、わが国でも研究者は多く、研究者のグループである日本ディキンソン学会も1982年に結成され、会員数も現在200人以上を数え、研究発表も盛況であり、また雑誌・紀要への研究論文の掲載もおびただしく、彼女の詩も数多く翻訳されて来ている。しかし、Whitmanの『草の葉』の全詩が邦訳され、彼が書いた新聞・雑誌記事や日記類も相当数紹介されているのに較べると、ディキンソンに関しては、まだ翻訳の信頼できる完訳すら出ていない。ディキンソン詩の全訳がなかなか出ないその辺の事情については、これまでも他のところで述べたことがあるので、ここでは詳細に述べないが、何はともあれ、彼女の詩が極めて難解であるということがある。かてて加えて、まさにディキンソン詩だけに特有な事情があり、それは彼女の詩は生前、出版されず、詩集は死後出版され、たちまち声望が高まったという事情があり、従って、それから派生する問題があるのである。つまり、彼女の詩は、死後に遺された原稿を元に、編集者の手で編まれたので、詩人本人の最終確認を経たおらず、遺稿は、ある意味では製作途中で未完成であったかも知れないものもあるに違いなく、それらの語彙・語法をどのように確定し、またどのように読んだら正しいのか分からないことも多々あるからである。逆に、ディキンソン詩には、そもそも出版を前提としていなかったため、世間の評判を意識しない彼女自身の率直な考え方、赤裸々な感受性があるのままだに示されていて、ディキンソン研究は、19世紀アメリカの教育のある女性の物の考え方、感受性、当時の文化状況、家族関係、社会生活、宗教観等を窺う上からも、文化史的に見ても、その研究の意義は小さくないのである。

しかし、ディキンソン詩についての日本人の研究は、必ずしもその総体が把握されているとは言えず、依然として断片的であり一面的である。その理由は、ディキンソンの伝記とディキンソン詩を本格的に研究しようしようとするれば、本国人の書いたディキンソン詩の評釈、批評、および伝記等を読まなくてはならないが、残念ながら日本人研究者の英語能力は限られていて、数多くの浩瀚なディキンソン伝を読み通し、咀嚼し、その中から枝葉末節の部分を刈り取り、虚偽や伝説の部分をはぎ取り、真実の部分自分なりに体系的に構築するには、高い能力と膨大な時間が必要とされることから、なかなか容易なことではないのである。

それで、私は、ディキンソンについて最も簡潔かつ的確に記された原書を、日本

の読者・研究者たちに紹介すべく、そのようなものを物色していたが、今回、Paul Ferlazzo の入門書が一番よいと判断したので、それを翻訳し、江湖の読者の便宜を図ることにした。

この本については、私が2001年秋にフルブライト研究員として Brown 大に出かけていた際に、現時点でのディキンソン研究家としては最も評価の高い St. Armand 教授と話しをしているうちに、Paul Ferlazzo の本書は出版年は古いが、依然として最良の入門書であるという点で意見の一致を見たので、是非、本書を翻訳してみようという気になったのである。ただここでは、紙幅の制限から、とりあえず、初めの1章について、翻訳し紹介しておくのである。

ファラッゾ教授の本は非常に明晰であり、複雑で込み入ったディキンソン詩と彼女の伝記方面のこと、あるいは文化的な背景について、簡潔に記述しているので、ディキンソンの全体像を比較的短時間に頭に入れてみよう、あるいは、ディキンソン詩をどのようなコンテキストでどのように解釈したらよいかを、もう一度調べ直してみようという人たちには、大変役立つ本である。

日本は、多年の英語教育の重視政策にも関わらず、いまだに翻訳文化の渦中にあるので、まずは翻訳が出ることから、その方面の研究が進むという傾向が強いので、私の翻訳が、ディキンソン研究、あるいはアメリカ文化研究に対して、それなりの貢献をすることを信じて、翻訳を示し、早晩、全訳を完成する予定である。

**[序文の解題]** ポール・ファラッゾ氏の序文については、特に解題の必要はなく、読めば一目瞭然たる主張がなされている。ファラッゾ教授は、ディキンソン研究の難しさを重々知っておられるので、それで特に、「難解な詩人であるディキンソンの研究という険しい道を進む際に、道案内となってくださった先達に敬意と感謝の念を捧げる」と記しておられる。前述したように、アメリカ詩においては、ディキンソンはホイットマンと並ぶ巨大な詩人であるので、19世紀アメリカ文学を全体的に論じる場合には、必ずそれなりスペースが割かれ、注意が払われている。私自身も「19世紀アメリカ文学」というタイトルの講義を、アメリカの3つの有名大学で、それぞれ別の機会に、アメリカ文学研究の一線の教授たちから聴いたことがある。それらは、Cornell 大の Michael Colacurcio, Harvard 大の Sacvan Bercovitch,

それに Yale 大の Wai Chee Dimock 教授の講義であるが、ディキンソンは、一学期の講義の後半部分で必ず取り上げられた。そして、19世紀の作家たちというのは、大抵、Emerson, Thoreau, Hawthorne, Melville, Whitman と Dickinson たちであった。

ディキンソン詩は、短詩であるが難解であるので、私は不明の箇所があると必ず、近くにいるイギリス人、アメリカ人の研究者たちに詩の解釈について質問をするのが習慣になっているが、本国人にとってもディキンソン詩を正しく理解することは困難なようである。それは、テキストそのものが、難しいということもあるが、その道に入ると、奥が入り組んでおり、あたかも奥深い山中で道に迷った感じで、なかなか抜け出て来れないからである。つまりは、思想的コンテキストが、入り組んでいて複雑だということがある。詩は凝縮されていて含蓄が深く、どのように把握してよいか分からない場合も多い。その場合は本国人も匙を投げるケースが多い。従って、ディキンソンが理解できる人は、アメリカの大学でのテキストを適当に読むスタイルではなく、Oxford 大学の様な古い大学で、語源、言語のニュアンス、含蓄、深さ、陰影の訓練を受けた人、そして聖書、ラテン、ギリシア文学をはじめとするヨーロッパ文学の伝統や、19世紀当時の宗教的なコンテキストまで理解できる人に限られよう。

さて、ディキンソン詩の研究の基盤が確立したのは、1955年、ハーバード大学出版局から、Thomas Johnson 博士が、ディキンソンの詩の遺稿や、手紙等に添えられて友人・知人に送られた詩等を収集、整理し、製作年を推定し、古いものから順次並べて行き、『ディキンソン詩』(*The Poems of Emily Dickinson*) という3巻本を編んだときに求められる。その意味で、このジョンソン版の出版は画期的な意味を持っている。それで、ファラッゾー氏は、そのジョンソン版について、序文の最後で特筆し、謝辞を述べている。

現在では、それらの元々の詩の原稿が一枚一枚、写真で撮影されて、分厚い2巻本となって出版されている。(R.W. Franklin [ed.], *The Manuscript Book of Emily Dickinson*, 1981) さらには、Yale 大学のフランクリン博士が、それ以降見つかった詩の原稿等を加え、筆跡や原稿が発見されたときの状況等を丁寧に検討し、ジョンソン版の遺漏を補遺し、さらに精密な3巻本を、作成し発刊した。(1998

年) さりとて、先のジョンソン版の価値が落ちるものでもなく、最大の業績はディキンソン詩の集大成を初めて成し遂げた、ジョンソンの1955年版にあるであろう。

**[年譜の解題]** ディキンソン家は、New England の旧家であり、祖父はマサチューセッツ州の西部地方に位置する Amherst にあるアマースト大学の創設者の一人である。父もアマースト大学の財務理事を務め、兄も同財務理事を務めたので、ディキンソン家はアマースト及びアマースト大学と切っても切れない関係がある。父は Whig 党员であり (その後、Whig 党は、1854年頃 Republican に吸収され、この様にしてアメリカでは Democrats との二大政党が確立することになった。)、長年マサチューセッツ州の州会議員を務め、国会議員も一期ほど務め (1852-55)、町の大立て者の一人であった。父は Yale 大学をトップで卒業した秀才であったが、その後、近在の Northampton Law School を出た。祖父は、事業に失敗し借財があったので、恐らくその辺が、エドワードがノーザンプトン法学校に通ったことと関係があるであろう。エミリの母となる Emily Elizabeth Norcross は、New Haven の花嫁学校を出たが、たまたまエドワードが Northampton (アマーストの南西15キロに位置する) に政治講演会の講師として出かけたときに見初めて、その後、手紙で忍耐強く求婚し続け、約1年半のつきあいののちに結婚したが、エミリ・ノークロスからエドワードへの手紙は誤字や語法上の誤りが多く、内容的にも希薄で、両者の知的な差は大きかった。後年、ディキンソンは、詩の指南番役であった T. W. ヒギンソンに対して、「私には、母と呼ぶような人はいませんでした。母は物を考える事とは無縁でした」(L, 264,342b) と、つれない言葉を述べている。

年譜については、それに続く本文を直接読んで頂けばよいわけだから、ここでは、簡単に2、3の特徴についてだけ述べたい。まず第一に、エミリ・ディキンソン家がアマーストの「西墓地」(West Cemetery) に接していたということがあり、そのことが、ディキンソンの思想の中核に死への想念を据えてしまったことは間違いない。特にエミリが10歳(1840年)から24歳(1855年)まで住んでいたノース・ブレザント通りの木造二階建ての家は、「西墓地」の裏門の入口の脇に立っていて、ディキンソン家の二階の窓からは墓地の様子が丸見えであったし、墓地に、日曜日毎にお墓参りのため出たり入ったりする人たちの様子が手に取るように見える場所にあった。それで、ディキンソンの想念の中心に死、葬式、埋葬、魂の行方というも

のが侵入し占拠してしまい、彼女の物の考え方に多大な影響を与えたことは不思議ではない。かてて加えて、当時のアマーフトは片田舎で、都会地のボストンがリベラルな理神論に近いユニテリアン派の宗教で席卷されているときに、依然として天国と地獄の観念がことさらに強調され、篤信、家庭内での祈り、教会に通い説教師の話を書く事が最重要のこととして強制されていた。従って、ディキンソンもそのような敬神の念、家長への尊敬、日常生活の勤勉と節約といったピューリタンの感覚を叩き込まれて育ったので、ディキンソンの考え方が、死と宗教と道徳(あるいはまたその反動としての、反宗教儀式、反道徳)の色合いに染められたことは大いに理解できる。

また、アマーフト大学の創設者の一人であったエミリの祖父の同僚に、アメリカ初の本格的な辞書を編纂した Noah Webster がいて、その初版は1928年に発行されたが、ディキンソンはこの辞書が少女時代の唯一の友人であったと言っているのので、読書好きのディキンソンがいかに辞書を愛用していたかが分かる。

第2に、ディキンソンが女性であることから、当然のことながら、幾人かの男性の影響が大きいということがある。(もちろん女性からの影響もあるが、それは主としてイギリスの文人である George Eliot, Elizabeth Barret, Emily Bronte 等の、世の生き方に反逆的な作家たちであった。)それは現実に接し、会話を交わし、また文通をしていた男性たちで、彼らはディキンソンより相当に年長で、知的に卓越した人たちで、物を教える師の立場にいる、しかも既婚者であるという特徴があった。かれらは現在知られている中では、順に、ディキンソン家の父の法律事務所で2年ほど実習生をしていた Benjamin Newton、次いで、1855年に父が国会議員をしていたときに、ワシントン経由で、アマーフト時代の旧友 (Eliza Coleman) のフィラデルフィアの家を訪問中に、その説教を聞いたマーチ通りの Presbyterian 教会の牧師をしていた Charles Wadsworth 牧師である。

それから、エミリより4歳年長で、アマーフトの南方30マイルの町 Springfield の新聞社の社長の息子(後、社長)であった Samuel Bowles がいる。この Bowles は、ディキンソンの生前、その詩を数編、彼の新聞の *Springfield Republican* 紙に掲載してくれた人だが、当時はすでに結婚していて、ディキンソン家には何度も出かけていて、アマーフト大学の卒業式の様子とその後のディキンソン家での園遊会を新

間に報知する一方、エミリーとももちろん会っている。そして、エミリーとは、1858～62年頃、相当に昵懇の仲になっていた。そして、1862年春、ボウルズが、結核の病氣療養目的でヨーロッパに船出したときも、エミリーと手紙で連絡を取り合っている。そのときエミリーは、単身でヨーロッパに出かけているボウルズに対して激しい恋心を感じて、ある意味で、はしたない手紙を出した形跡がある。さらには、ディキンソンの残した遺稿の中に、一度書いてはみたが、投函せず手元に残していたため、詩集の束と一緒に発見された3通の宛名不明の“Master Letters”と呼ばれる“Master”(「主」)に向けて書いた草稿の手紙があるが、ボウルズがその手紙の宛名人ではないかと目されている。(現在までの研究ではまだ確定されていない。)このボウルズは、あるとき犬のカルロを連れて、月明かりの下で、ディキンソン邸の近在の森の中を散策した経験もあるが、そのときの二人の関係は相当にロマンティックなものようである。しかし、彼は実務家タイプで、政治経済方面の記事に優れていたが、エミリーの詩の質についてはまったく判断力を持たず、つれない態度を取っていた。

さらには、ディキンソンの関係する男性には、晩年になって親しい付き合いのあったマサチューセッツ州高裁判事 Otis Lord がいる。ディキンソンの父は1873年(エミリー42歳のとき)、ボストンの州議会での演説の後、脳溢血で倒れ、その夜、死去しているが、後に残されたエミリーとラヴィニアの二人の娘たちの一種の後見役としての立場を引き受けたオーティスが、何度かディキンソン邸を訪問しているうちに、ディキンソンの方から激しく恋心を抱き、手紙を頻繁にやりとりしだした。ロードの妻が死んだとき(1880年冬)から、両者は結婚を考えたが、最終的には、お互いに遠方に住まうこと(ロードは Salem に住んでいた)、ロードの姪たちが猛反対したこと、二人とも相当な年齢になっていたこと、ディキンソン自身のアマーストの自邸と町への未練が大きすぎて、結婚まで進まなかった。この事件は、エミリーが外聞を気につけない心情重視の人で、決して、白衣を着たニューイングランドの尼僧的な隠遁者どころではなかったことの一つの例証となるであろう。

さらには、文学上の指南番の役をして、最後、エミリーの葬式にも列席し、なおかつエミリーの詩集を編纂し、序文を付け刊行してくれた人に、当時の人気文芸評論家の T.W. ヒギンソンがいたのであるが、彼はディキンソン詩を理解する上では、最

重要人物であり、彼についての紹介は詳細に渡る必要があるので、ここでの言及は控えることにする。

第3の重要点として、ディキンソンの宗教体験とその危機が上げられる。ディキンソンは16歳（1947年）のときに、アマスツトから、南西20キロの丘陵地の山間の地にある、South Hadley にある Mount Holyoke Female Seminary（現在の Mount Holyoke College）という、当時創設されて10年目に当たる女学校で、初めて家元を離れて集団の寮生活を送ったが、このときの様子は、ディキンソンの手紙に詳しく書かれている。この女学院は、牧師たちや町の指導層の妻を養成することをその目的の一つに想定された学校で、特に校長の Mary Lyon 女史の情熱と真剣さは相当なもので、規律としつけはもちろん、宗教的な信仰の問題についても立ち入ったところまで指導し、最終的には敬虔なキリスト者に仕立て上げることを目的としていた。そのような集団生活の中で一種のスパルタ教育をほどこされたディキンソンは、超真面目に学科にも取り組んだが、もともと虚弱で神経質で、物を考えすぎる気のあったディキンソンは、特に女学院の宗教上の性急な押しつけに反発するところとなり、精神的にストレスが貯まり、次の2年次には、父エドワードのエミリの健康への顧慮もあり、女学院には戻らなかった。ここでの教育の中退に至る体験が、感受性の強い若い彼女の心にトラウマとして残ったことは、疑いないところであろう。

第4に、彼女の眼疾のことがある。ディキンソンは、31、2歳の頃、眼病を発病し、ケンブリッジ（ハーバード大近くの現在の Central Square 近く）のアパート下宿して（エミリの母方の従妹二人の娘たちが住んでいたアパートで、彼女たちの名は Francis と Loo Norcross と言った）、ボストンにある眼科医に通った。この眼病は、もしかしたら失明するかも知れないという恐怖をディキンソンにあたえたという点、彼女のいくつかの詩にそれが反映されているという意味で重要である。また、当時人口が3000人程度のアマスツトのような片田舎の者が、当時のアメリカ随一の大都会であったボストンに住み、一種の知的な刺激を受ける一方、その文化・文物・交通・教育・騒音・スモッグ等に触れることで、都会と田舎の両方の生活を比較できたという意味では、これは、女性ゆえに当時の学校教育を拒まれたエミリの一種の遊学体験ともなり、それが、彼女の詩を作る上で、一つの視角とパースペクティ

ヴをあたえ、深みを加えさせたという意味では重要である。その他については、ファラッゾーの本文の中に詳しく言及されるので、ここでは特に触れないことにする。

**[第1章の解題]** まず第一章の「伝説と人生」の中の小見出しを点検してみよう。それらは、1. 神話の創出、2. アマースト、3. 家族の肖像、4. 友情とほのかな思慕、5. 生育歴となっている。

1の「神話の創出」では、ディキンソンについては、白衣の隠遁者という神話が広く流布されているが、それはどのようにして作られ流布されるようになったかについて考察している。特に（エミリーの兄オースティンとスーザンの子である）姪のマーサ・ピアンキが、手元に残されていた原稿の中から、詩集を編み、出版し始めた頃から、叔母さんのエミリーには心に深く秘めた思慕の人がいて、それは、他ならぬフィラデルフィアの牧師 Charles Wadsworth 師で、その悲恋が、エミリーが邸内に籠もった理由であると言い出したことが述べられる。そのようなロマンスの存在は、当時のセンチメンタルな女性読者層に受けたので、そのエピソードを中核に据えて、伝記や小説や演劇が書かれたことが述べられている。ここに書かれている。ボリットやジュネヴェーヴの伝記は分厚いものであるが、今では、その一部分のみが、専門的伝記研究家によって読まれる程度である。

現在では、イェール大の元教授だった Richard Sewall の *The Life of Emily Dickinson* あるいは、MIT の教授 Cynthia Wolff の *Emily Dickinson* が最も信頼できる伝記として上げられるであろうし、最近では、Alfred Habegger, *The Life of Emily Dickinson* (2001) が出て、ディキンソンの伝記方面のその研究はヨリ精緻なものになって来ているが、ファラッゾーの本の出た時期（1976当時）には、まだこれらの伝記は刊行されていなかった。

2の「アマースト」では、コネティカット川流域にあったアマーストの地では、特に有名な説教師 Tom Stoddard と、その後継者で孫の Jonathan Edwards の影響が強く、ピューリタンの宗教的な雰囲気が強かったこと、そして、人々の娯楽は少なく、町の祭りと言え、8月のアマースト大学の卒業祝賀会と10月の秋の共進会程度であったことが述べられている。

3の「家族の肖像」では、父エドワードが謹直で謹厳なピューリタンの権化みた

いな人であり、町の尊敬を一身に集め、アマースト大学の財務理事を務める傍ら、州議会議員と国会議員を務めていたこと、兄の Austin はハーバード・ロースクールを出た後、西部のオハイオ州に活躍の地を求めたが、父の懇請もあり、ディキンソン邸の隣に邸宅を作ってもらい、アマーストの地に留まり、父の片腕として弁護士として活躍し、その妻の Susan Gilbert は、町の社交界の中心人物として重鎮をなしたが、一方、エミリとの間は、疎遠になっていったということが書かれている。

4の「友情とほのかな思慕」では、ディキンソンのアマースト・アカデミーでの女友達たちとの文通を通してのディキンソンの内面が分かること、当時のエミリの学業への取り組み方、そして、当時のエミリの思慕していた学校の先生たち（特に若くて亡くなった校長の Leonard Humphrey）、それにディキンソンがマウント・ホリヨーク女学院に行っていたときに、実習生として父の法律事務所に務めていた Benjamin Newton のことが記されている。ニュートンは、ディキンソンに文学方面の最新の知識を与え、特にエミリにエマソンの詩集を贈ったことから、ディキンソンの将来の指針ともなり思想の基盤をなしたエマソンを紹介したという意味で、多大な影響を与えたこと、そして、そのニュートンが程なく結核で死去したことは、ディキンソンの若い心に衝撃を与えたに違いないことが述べられている。

5の「生育歴」では、小・中学校に当たるアマースト・アカデミーで学んだ学科目、例えば、ラテン語、ドイツ語、フランス語、生物、地質学、歴史、哲学、作文等が言及され、その教育が生半かなものでなかったこと、次いでマウント・ホリヨーク女学院での教育が、日常の規律と宗教教育に重点が置かれていたこと、そしてディキンソンはその宗教教育、特に敬虔なキリスト者になるようにという性急な押しつけ教育に反対して、ついに信仰の告白を拒否したことが述べられている。特に、その最後の部分で、ファラッゾー教授が、『『世間事を諦めること』をしたくないとすることで、逆説的ながら、彼女は自分を取り巻く世界から身を引いたことになる。そして、彼女は結局、詩を創作することに本分を見いだし、別の世界を探求する旅に出たのである』と述べているのは慧眼である。つまりは、キリスト者になるということは、そのようなキリスト教の一定の見方で世界を切り取って見るという意味であり、特に死後の永世、最後の審判、善人と悪人の決定論を受け入れること、また敬虔で従順な人間になり、キリスト教の行動様式、思考様式を受け入れることを

意味するが、ディキンソンには、まだいろいろと世間のことを知りたい、様々な見方で見る自由を残しておきたいとの欲求から、未決定の状態、モラトリアムの状態（それは多様性をまだ残していたいという意味であったであろう）を欲したものであったのであろう。そして、人間としても詩人としても、エマスの自恃の精神を維持して、世の中に立って行こうとしたのであろう。そうした決断を当時のハイ・ティーンの少女が集団生活の中で、真剣に悩みながら切羽詰まってなしたということ、そして、そのストレスから学業を停止したということは、彼女の心にトラウマを残すような大事件であったに違いない。しかし、そのことが皮肉なことに、結局、世の中の万事に対し背を向けて、邸内に隠遁するという形になったのは一つの逆説であるという見方をファラッゾー教授はしている。これはなかなか含蓄のある、信頼できる考え方であると私は思う。そのことも、私がこの翻訳を決心した理由の一つである。

## ポール・ファラッゾー『エミリ・ディキンソン』

### 目次

著者について .....	12
序文 .....	13
年譜 .....	14
伝説と伝記 .....	16
信仰の問題 .....	
死ぬべき生命のこの人生 .....	
愛の諸相 .....	
正気を保つたためのもがき苦しみ .....	
自然の秘密と光彩 .....	
詩人が書いた散文方面 .....	
後世への影響 .....	
註と参照の書物 .....	
精選書誌 .....	
索引 .....	

### 著者について

ポール・ファラッゾーは1966年、セント・フランシス大学で学士号を取得後、NDEA 奨学資金を得て、オクラホマ大学から1967年に修士号、1970年に博士号を取得した。現在はモンタナ州立大学の英文科主任教授。

ファラッゾー教授の出版物としては、ホイットマン、ソロー、ディキンソン、サンドバーグ、大衆文化や地方の文化・文学に関する論文がある。『エミリ・ディキンソン批評論集』の編集者でもある。

ミシガン州立大学で1974年に教育・研究賞を受賞し、1975-76年、フルブライト講師として、ボローニャ大学でアメリカ文学を教える。現在、アメリカ・フルブライ

ト同窓会の副会長を務めている。

## 序 文

エミリ・ディキンソンの人生と作品について、簡潔な入門書を書くことはますます難しくなっている。優れた研究書は今や膨大な数となり、しかも年々歳々増え続けているからである。簡潔な入門的著作を物するという目標を設定した私にとって、至難のことは、研究のうえから最も重要な点は何なのかを意識し、それを最も明確な形で示しうる系統的道筋を見つけ出すことであった。このような目標を達成すべく、私は比較的直截なアプローチを取ることにした。まず第1章で、「エミリについての神話」と彼女の現実の人生について、これまでに知られている資料と突き合わせてみた。続く5章において、ディキンソン詩における主要テーマを扱ったわけだが、そこでは代表的詩を十分に評釈し、彼女が生きた時代、彼女の精神を形づくった諸影響力や、彼女独特の感情や感覚の特徴について述べた。第7章では、彼女の書いた散文方面を扱っているが、それはこれまで軽視されて来たということばかりでなく、彼女の人生と人物像のこれまで比較的知られなかった側面をヨリ明らかにするために取り上げた。最終章では、ディキンソンの現代文学に対する影響力を検討した。

この本を書くに当たって、私は多くの人たちのお陰をこうむった。まず私の同僚で研究者の模範であるデイヴィッド・アンダースン教授に心から感謝を捧げたい。それは私に寄せてくれた信頼と常日頃の激励が、本書を書くにあたって力をあたえてくれたからである。また、ディキンソンについて私の確信をさらに強め、難解な詩人であるディキンソンの研究という険しい道を辿る際に、道案内となってくださった先達に敬意と感謝の念を捧げる。

ここで特別の敬意を捧げたい人たちがいる。それらの方々は、チャールズ・R・アンダースン、リチャード・チェイス、ジョン・コーディ、クラーク・グリフィス、トーマス・ジョンソン、そしてリチャード・B・シューウォールである。また本書を、陰に陽に私を支えてくれた妻に捧げたい。トーマス・ジョンソン編の『エミリ・ディキンソンの詩』とトーマス・ジョンソンとセオドラ・ウォード編の『エミリ・ディ

ポール・ファラッゾー『エミリ・ディキンソン』

キンソンの手紙』からは、アマースト大学評議会の許可を得て引用させて頂いた。後者からの引用許可については、ハーバード大学出版局からの許可も得た。第3章の最終章は、『エミリ・ディキンソン・ブレティン』第3号に掲載されたことを断っておきたい。

ミシガン州立大学  
ポール・J・ファラッゾー

## 年 譜

- 1830 12月10日、マサチューセッツ州アマーストに、エミリ・エリザベス・ディキンソン生まれる。
- 1840 4月、メーン・ストリートの屋敷から、ノース・プレゼント通りの家に転居。  
9月7日、アマースト・アカデミーに通学開始。
- 1846 8月末から9月中旬、健康治療を兼ねて、ボストンに在住。
- 1847 8月10日、アマースト・アカデミーで7年生を終え、卒業。
- 1848 1月、厳しい宗教的危機を体験する。8月、マウント・ホリヨーク女学院での1年間の学業を終える。ベンジャミン・F・ニュートンに出会う。
- 1850 1月、ニュートンが、エマソンの『詩集』をエミリに送ってくる。ディキンソンの「師」(“master”)であったアマースト・アカデミーのレナード・ハンフリー、死去。
- 1852 2月20日、『スプリングフィールド・リパブリカン』にヴァレンタインの戯詩「かくて過ぎゆく」が掲載される。
- 1853 3月24日、ウスターにて、ベン・ニュートン、死去。
- 1855 3月、フィラデルフィアにて、チャールズ・ワズワース牧師に出会う。  
11月、メーン・ストリートの旧居に転居する。母の長患いが始まる。
- 1858 『スプリングフィールド・リパブリカン』紙の編集者であるサミュエル・ボールズとのつきあいが始まる。愛する誰かに宛てた、最初の「マスター・レター」が書かれた。
- 1860 3月中旬、チャールズ・ワズワース牧師が、アマーストのエミリを訪問す

- る。
- 1861 2通目の「マスター・レター」が書かれる。5月4日、「かつて醸されることのなかったお酒を味わう」が『スプリングフィールド・リパブリカン』紙に掲載される。
- 1862 冬、精神的危機を経験する。3月1日、『スプリングフィールド・リパブリカン』紙が、「雪花石膏の部屋の中で」を掲載する。4月15日、トーマス・ウェントワース・ヒギンソンとの間で、文通が始まる。3番目の「マスター・レター」が書かれた。この年に、366編の詩が書かれた。
- 1864 『ラウンド・テーブル』誌が、「安息日に教会に通う人たちがいる」を掲載。3月30日、『スプリングフィールド・リパブリカン』紙に「金色に燃え、紫色に輝く」が掲載される。
- 1865 4月から11月、眼の治療のため、ボストンに行く。彼女の最も多産な期間の終わり。
- 1866 2月14日、『スプリングフィールド・リパブリカン』紙に、「草の中の細い奴」が掲載される。
- 1870 8月16日、トーマス・W・ヒギンソンが訪問する。
- 1873 12月3日、ヒギンソンが、2度目で最後の訪問をする。  
6月16日、ボストンにて父、死去。オーティス・P・ロードに相談相手になって貰う。
- 1875 6月15日、母、卒中で麻痺状態となる。この後、エミリが常に母に付き添う形になる。
- 1878 1月16日、サミュエル・ボウルズ、死去。匿名の詩人たちのアンソロジー『詩人たちの仮面』に「成功は最も甘美」が掲載される。  
12月に妻を亡くしたロード判事との関係が、愛の関係に発展する。
- 1880 8月初にチャールズ・ワズワース牧師が、突然再訪する。
- 1882 4月1日、ワズワース牧師、死去。11月14日、母、死去。
- 1883 3月13日、ロード判事、死去。6月14日、エミリ、病気になる。
- 1885 秋、病臥する。
- 1886 5月15日、エミリ・エリザベス・ディキンソン、死去。

ポール・ファラッゾー『エミリ・ディキンソン』

妹のラヴィニアは、姉の手紙をほとんど消却処分するも、詩のみは残した。

1890 メイプル・ルーミス・トッドとトーマス・W・ヒギンソンにより、エミリの詩の初版が出版される。

## 伝説と伝記

これまでのエミリ・ディキンソンのイメージとは、一大センセーションを巻き起こした感傷性とロマンスが交錯するものであった。だが、最も広く受け入れられている肖像は、「ニューイングランドの尼僧」というものであろう。この見方によれば、ディキンソンは白い服を着、父親の屋敷内に隠遁し、今は失われたある男性への永遠の愛を、悲しみの中にも気高く純粋に、一人育まんがために世間との接触を絶った悲劇のヒロインというイメージとなって立ち現れる。われらのヒロインは孤独な部屋の中で、沈黙のうちに、失われてしまった神秘の恋人に対して、祈りを込めながら、秘められた心情を短詩の中に書き綴ったのだ、と。たしかに、神秘の中核にある事実は、成就できなかった愛であったかも知れないが、他方、自然や子供たちに対するディキンソンの細やかな愛情は、彼女にまつわる感傷性をヨリ深めている。男性たちと同席のときはうちとけなかったにも関わらず、神の創られたものたち——ミツバチ、鳥、少年たち——とは心を開いて交流したからである。あまりに巨大な才能ゆえ、生前は沈黙を守り通したものの、エミリが世を去ったとき、居室の筆筒の中から、個人的苦悩を表す手紙や詩を納めた小箱が発見されたことは、ディキンソン神話の神秘性をいや増さしめた。知的なそしてまた感情的な表現に、狭苦しい枠をはめた当時であったので、結局、詩人は生前、記しとめておいたものを通じて最後に勝利したことになるが、彼女の書いたものは時代を超えて不滅の価値を持っていることが証明された。詩人の精神は、人々の意識の中に、秘められた天賦の才能と生前は公にすることを否定された愛の象徴として入り込んだ。

このように、ディキンソンの人生は、若くロマンティックな者たちの想像力に訴えるものがある。彼女の詩を読む読者たちは、彼女の人生についての秘められた逸話を楽しむが、それはお城に幽閉されたヒロインとか、毎日下働きの労働をさせられていた美しい女中とか、抑圧されていた才能が最後に花開いた天才たちのことを

思い起こさせるからである。そうした者たちにとって、彼女の人生は、愛を通じての不滅性や、理性や秩序よりも感情と感覚の持つ優位性や、苦しみに直面しつつも限りなく夢を抱きながら生き抜いた精神を現している。従って、ディキンソンは、虚構の中や白昼に見る夢の中で、賛美しつつ夢見ているが、実はそうした徳や価値を実現する気力も機会もない普通の人たちにとって、聖なる代言者のように見えるのである。

## I 神話が創られた

「エミリの神話」が創られ固定観念になったことの責任の一半は、ディキンソンの最初期の伝記作家たちや小説家や劇作家たちに、その淵源を辿ることができるが、彼らは彼女の人生に関して半ば虚構をない混ぜにしなが、面白いお話を造り上げたのである。詩人の姪のマーサ・ディキンソン・ビアンキは、1914年頃から、自分の手元に残されていた原稿から、詩を選んで出版し始め、伝説の中核に存在するものについて言及し始めたが、それはディキンソンの秘められた愛の生活、特に失恋体験についてであった。詩集『孤独な猟犬』（1914）の序文の中で、ビアンキは記している。「ディキンソンがとりこにされた男性たちの一覧表には…アマーフト大生、チューター、弁護士事務所の実習生、女友達の兄たちがリストされている。時には他の女性の婚約者もあった。さらにはもっと爛熟した恋愛——文学的な、プラトニックな、時には地獄的なもの——もあった。深淺、様々なつきあいがあったが、少なくとも一つの情熱的恋愛があった。その恋愛の悲劇性は、恋人同士が相手の立場を大切に思うあまり、お互いに煩悶しつつ、却って心の中での至福を得るというような性質のものであった」と。

ビアンキは、1924年の『エミリ・ディキンソンの人生と手紙』の中で、「平安の終わり」という章を設けて、さらにこの「情熱的な恋」の物語を続け、エミリ・ディキンソンが1854年春にフィラデルフィアで出会った妻帯者に対する熱烈な恋愛について記している。社会的道徳的規範を犯し、かつまたその男性の妻の権利と幸福を破壊するにしのびないゆえ、エミリは完全かつ永久に父の邸内に引きこもったのであると。そして男性の方は、そのような自分の内面を抑圧しながら生きることは

ポール・ファラッゾ『エミリ・ディキンソン』

難しいので、家族ともどもアメリカ大陸の反対の側のカリフォルニアに転居して身を引いたのである、と。ビアンキは、この男性との恋愛事件の秘密についてもっぱら仄めかすことで、読者をじらしている。しかし、その秘密をディキンソン家の人々がお墓まで持って行ってしまった今となつては、明らかにするすべはない。裏付けは取れないが、興味を繋がせるものである。<sup>2</sup>

1930年代に、二つの伝記が出たが、それはビアンキのエッセイ同様、ディキンソンを取り巻く神秘性を解いてみようとして、病的で異常だとされて来た彼女の生活の仕方について合理的な理由をあたえようとしたものであった。しかし、ディキンソンの人生の中心的事実として恋愛事件にあまりにも重きを置きすぎたため、二つの本がなしたことと言え、エミリ・ディキンソンの精神と魂をさらにロマンティックに、分かりにくくしたことであった。それぞれの伝記作家は、恋人役としてある一人の候補者を挙げ、その男性の上に多大な感傷性を積み上げた。『エミリ・ディキンソン——詩の人的背景』のジョセフィーヌ・ポリットによると、ディキンソンの幼友達であったヘレンの夫となったエドワード・ハントこそが、秘密の男性であった。<sup>3</sup>ポリットによると、ディキンソンは1854年にフィラデルフィアを訪問中に、当時ヘレンと結婚していたハンサムで頭脳明晰な陸軍工兵将校のハント少佐に会った。ハントはディキンソンにこの上もなく惹かれたが、その理由は確かに性的には魅力のある自分の妻とは違って、自分の言葉に真剣に耳を傾けてくれ、的確に反応できる精神を持っていたからであった。ポリットは、恋人たちの間で交わされたであろう会話を想像して記しているが、二人は正反対の特徴を持っていた。つまり、ハントは合理主義的な科学者タイプ、そしてエミリは感情の深い芸術家タイプで、従って、お互いの引力によって、理想的な調和がもたらされたのである、と。しかし、エミリは、結局、ハント少佐をヘレンの元へと返し、秘めた恋心によって、詩を創作し続けるための情熱と苦悩とで満たされたのである、と。1863年10月、ハント少佐が陸軍工兵隊における科学実験中に事故死すると、秘められていた慕情の証として、ディキンソンは神経症・鬱病と眼病を併発し、7ヶ月後に、眼科医の治療を受けるため、ボストンに行くことになったのである、と。

ポリットの本が出版された6ヶ月後に出版された『エミリ・ディキンソンの人生と心』という伝記の中で、ジュネヴィーヴ・タガードは、ジョージ・グルドをディ

キンソンの秘められた恋人候補として挙げている。<sup>4</sup>タガードは、1850年当時、アマースト大の学生であったグルドがディキンソン家をしばしば訪問中、エミリと恋に落ちたのだとしている。

グルドはアマースト大を卒業後、ニューヨーク市のユニオン修道院で研究を続け、後にフィラデルフィアで牧師になったが、1854年、ディキンソン家を訪問中、恋愛感情が再燃したのである、と。ディキンソンは彼のことを受け入れなかったが、それはタガードによると、エミリの父が娘に強い愛着心を持っており、娘の恋人に強い嫉妬心を抱いたので、父の元を去ることができなかったからであるとされる。タガードは、自説への重要な証拠として、宣誓した上での「某氏の言」として陳述を記しているが、その某氏は、ディキンソンの妹のラヴィニアなど3人の人たちが、グルドこそがディキンソンの恋人だったと告げたとしている。

これら二つの伝記は、正確さを身上とする伝記研究としては、現在では不適切なものだと見なされている。なぜなら、彼らは根拠のない前提、たまたま聞いた伝聞、偶然の一致、また誤った証拠等に頼っているからである。しかし、ディキンソン研究の初期の頃には、それらは一般の読者たちが思わず受け入れてしまいそうなおいしい恋愛話となって、ヒロイン的なイメージを作り出した。さらに、1930年になって、詩人を理想化し感傷的なものにした「伝記」が、ディキンソン邸の道路越しに1869年に生を受けた男性によって出版された。マックグレゴア・ジェンキンズが彼の幼少時のディキンソンの印象を『エミリ・ディキンソン—友人で隣人』<sup>5</sup>として書いたとき、ジェンキンズが努力したことは、ディキンソンについての神話性を極力排し、人間的で理解しうる者にすることであった。

ジェンキンズのこうした目的と、エミリが子供たちや親しい友人たち対して極く普通の愛情を示したというような回想はあるものの、その本の中には、彼女の神秘性を逆に増大させるような例も数多く含まれてしまった。私たちは、父の屋敷内をふあふあとして漂い歩く、虚弱で精霊のような人を見てしまうし、他人の足音を聞くとさっと姿を消す人、忘我状態で夕日を見つめる人を見るし、わけもなく感情を急変させる人を見る。そしてジェンキンズは、こうした彼女の振舞いは、精神生活に没頭している鋭敏な詩人氣質によるものとしている。ジェンキンズが、いかに誠実に事実を思い出したとは言え、この本は、60歳になった男性が45年あまり前の、ほ

とんど稀にしか姿を垣間見ることのなかった女性の姿を思い出しつつ記したということに留意する必要がある。追憶や感傷性というものは、過去の記憶に対して、ごく自然にそれなりの色彩を帯びさせるのが常であるので、ジェンキンスも所定の目的の神話性排除のかわりに、神話をさらに洗練され複雑なものに倍加してしまっただと言えるであろう。

これらの伝記類は専門の研究者たちにそれなりに利用されて来たが、一般の人たちは、ロマンティックに詩人のことを描いた、小説や演劇によって影響を受けた。こうした文学作品は、悲恋をエミリの人生の中心的な事実として捉え、彼女が世間から身を引いて詩人となったのは、彼女が愛した男を獲得できなかったせいであると仄めかしている。これらの見方をする者たちは、同時に、他のモチーフもかなり感傷的に扱っている。つまり、周囲の者たちの感情生活に影響をあたえたエミリの鋭い感受性、自然や子供たちへの細やかな愛情、そして密やかに行われていた詩作活動等々である。

これらの小説や戯曲は、それまで秘かに隠れていた偉大なアメリカ詩人を、一般的注目を浴びる存在にしたことは確かである。一方、これらの小説や戯曲は、エミリ・ディキンソンという女性詩人の真の姿を、分かりにくいものにしてしまったのである。

1931年に、スーザン・グラスペルにピューリツァー賞をもたらした3幕劇の『アリスンの家』は、死んだ詩人の家族に、もともと世界が共有すべきものである原稿を保有したり、詩人についての情報を隠す権利があるかどうかを問題にしている。舞台背景はアイオワ州に設定されて、家族はスタンホープ家と名づけられてはいるが、エミリ・ディキンソンの人生や文学上の代理人や、親族たちの態度を扱っている。劇の筋書きは、死去した詩人アリスンの、未発表の詩集の束が入っている革カバンを中心に展開する。その革カバンを詩人の妹が火にくべて燃やそうとするが、結局、失敗するという筋である。自分の行為を弁護して妹は叫ぶ、「お姉さんは世間なんかに属していません！ お姉さんは私たちのものです。そして私はお姉さんを世間から守るのよ。世間の人たちにお姉さんを捕られたくない。たとい、私が殺され、あなたたち世間の人たちが死んだとしてもね！」<sup>6</sup>と。詩人の兄が、詩の内容そのものを知るようになったとき、つまり妹が、生前、ハーバード大学を出て、すで

に結婚していたある英文学者への熱愛を持っていたと知るようになったとき、兄はついにその詩を焼却することに同意する。

しかし、アリスンの若い姪が自分の父に掛け合って、詩集の束を自分に預けさせてくださいとお願いする。姪はそれらの詩を、愛の名にかけて全世界に紹介したかったのである。「ここには彼女が生前完黙して口に出さなかったものが書かれています。彼女はこれまでに書かれたことがないような真実を書いたのです。朽ちることのなかった愛、孤独。愛の美しい苦悩がここには書かれています！」この劇は、第一にエミリ・ディキンソンの「精神」についての賛辞であり、観客は偉大な個性が大きな力を持って存在することを感じさせられる。登場人物の一人が述べるように、「彼女は死んでいません。彼女についてあらゆるものが今でも生きています」。<sup>8</sup>彼女の人生と自然に対する愛は、家族の者たちが彼女のことを思い出すことで響きわたる。そして、家族の者たちは、彼女から伝えられるものによって幸せな心持ちにさせられるのである。

1947年にドロシー・ガードナーによって創案された3幕劇『エデンの東側』における主題は、ディキンソンとチャールズ・ワズワース牧師の恋愛である。ガードナーが恋人たちの会話を想像した際、彼女は恋人たちの口から、理想的な自分たちについて、ときには混乱した説明をさせている。たとえば、ディキンソンはワズワースに対する愛を第1幕2場で、次のような言葉で定義づけている。「愛は…[うっとりとした情熱的な調子で] 愛はすべての存在、すべての華、すべての色彩、すべての音、すべての天と地、すべての人生であるべきです。[間]。そして、すべての死であるべきです」。<sup>9</sup>こうした宣言が、一体何を意味するのか誰も明確にすることはできないが、ガードナーの目的は明らかに、エミリ・ディキンソンの感情や思想について何かを的確に伝えることではなく、それらが豪華絢爛にして優れたものであることを伝えることにあったと言えよう。

しばしば、現実の会話の代わりに、ガードナーはディキンソンに彼女の詩句を少し言い換えただけの台詞を喋らせている。

この少しずれた効果は、時宜を得ない、様々な大仰な詩句を寄せ集めにするだけで、詩で表現された観念の力を矮小化してしまっている。またさらに、ガードナーは、詩人の性格を、活力に満ちた言葉で表現する想像力を持ち合わせず、大げさな

演劇的な仕草に頼ってしまっているように思われる。

水は乾きによって教えられます。恍惚は苦痛によって。私たちが絶望というものを知らなければ、どうして絶望から上がっていけましょうか。私たちは勇気というものを暗闇の中に知ります。苦悩のために、死のことを予測します。そのようにして、他の人たちに怖がらなくてもよいと教えることができます。私は人生の味を一度だけ知りました。それがまさに——私の存在——を犠牲にさせました。でもそのことで、私は永遠を知ったのです。愛は人生の前にも後にもあります。そして、私たちが愛するとき、大地は天国の一部なのです。私はそう信じています。しかし、愛する者がいないと、永遠という広いポケットはきっと掏られてしまうことでしょう。私は信仰を持っています。しかし「証明」がほしいのです。<sup>10</sup>

第2幕3場には、ディキンソンが夢見たワズワースとの結婚生活の大願成就のシーンがある。そのシーンでは、ディキンソンが編み物をしている傍らで、ワズワースが『私が世界に宛てた手紙』という作者不明の詩集から朗読する。2、3の詩を読んだ後、ワズワースは、この詩はエミリ自身によって書かれたに違いないと気づく。「君が書いたのだね…この世界に宛てた手紙は！」<sup>11</sup>

もちろん、運命の星の下で男女がすれ違う悲恋物語は、独身の女性が引き篋もって詩を淋しく書きつけているという図にくらべたら、はるかに華やかな劇になるであろう。しかし、ディキンソンの創造生活をそのように薄っぺらに取り扱うことで、ガードナーはなによりも偉大な詩人であった女性の肖像を歪めている。ガードナーは、私たちからエミリの天才に対する理解と賞賛を引き出すより前に、失恋の傷心物語の方に同情心を向けさせようとしているので、劇の中に、虚偽を付け加えたことは、芸術家としてのディキンソンの理解を妨げるばかりでなく、チャールズ・ワズワースの役割をも破壊している。この劇が書かれた当時の最も信頼すべき伝記作家であったジョージ・フリスビー・ウィッチャーは確かに、「ワズワース牧師こそがエミリ・ディキンソンの人生において最重要な人物であった」と認めている。しかし、ウィッチャーはまた、証拠なくして「ワズワースの方でもディキンソンが一番の重要性を持っていた」<sup>12</sup>などに見なすべきでないと主張している。ウィッチャーはワズワースのことを、恋人と名指さず、その人物像を分析した結果、彼がディキンソンの恋人役を演じることは不可能であったとしている。つまり、ウィッチャーの

立場からみると、ガードナーはワズワースの人生を勝手に作り変えたわけである。そして、根拠もなく、明らかに事実と反しているロマンティックなディキンソン像を作りあげたのである。

最後に私たちが取り上げるノーマン・ロスティンの『エデンよ、ゆっくり来よ』は、ガードナーやグラスペルの演劇にみられる感傷性の過剰ということからは免れている。しかし、それもエミリー・ディキンソンは謎めいた精霊のような人物で、その詩は情熱と経験の神秘的な井戸から湧き出て来たとしている。劇の中で、詩集の出版を任されたトーマス・ヒギンソンが、その劇の目的について早い部分で述べている。「こうした詩から、いかにして詩人本人の真の人生に辿りつけるのだろうか。詩には日付もなく標題もなく、ただ手がかりとなるキーのみが存在する。私たちは沢山のことを推察しなくてはならない。私たちはそっと足を踏み入れるのだ。詩人の日常、詩人の庭、曙、夕べ、雲、嵐や痛みを推察するのだ。そして私たちの想像を絶する、激しい情熱のことをね」。<sup>13</sup>人物像の証拠として、詩や手紙が神秘的な形で投げ込まれ、ヒギンソンや妹のラヴィニアが証人として登場する。

批評的なアプローチにもかかわらず、この演劇の大部分はディキンソンの最も人気がある40編ほどの詩の朗詠である。そして、エミリーの感受性、孤独、愛をほのめかす手紙の多くの箇所を朗読で終わっている。早い方で、詩人の技量を探求してみようとする形ばかりの努力がなされて、ヒギンソンは「幽暗のはかない一本の道」を朗読し、そして結論づける。「おやおや、私たちは依然として19世紀にいる。しかし、彼女だけは何かしら時代の先を行っているのだ！ 8行のうち2行しか韻を踏んでいない。この詩の後、何が起ころうとしているのだろうか」。<sup>14</sup>ときどき、詩行がエミリーの行動の説明のために織り込まれる。たとえば、父や妹がエミリーに、なぜ朝食の準備をし忘れたのかと尋ねると、エミリーは、それは「鳥が小道をやって来た」の詩の朗読に夢うつつになっただけからであると答える。そして、大部分の詩や手紙は、伝記的な事実として利用されている。たとえば、「天国へ行くのですって！」とか、「日曜日に教会に行く人たちもいる」などは、彼女の宗教的意見を要約しているものとして意味づけられる。第2幕はすべて愛の詩に集中させられているが、それはワズワース牧師との邂逅の場面を浮き彫りにする意図から、そうなっているのだ。例えば、「もし貴方が秋に来られたなら」という詩は、二人の最初の邂逅の後、

エミリが彼を5年間も、期待して待っていたことを意味している。

こうした劇が信用できない理由は、人生の事実と詩に表現された想像世界との間には照応があり、またあるべきだという前提にある。ディキンソンのように私的な詩人の場合には、そのような照応関係があるかどうかには相当に異論があるであろう。ロスティンの劇に見られるのは、詩の中の考え方や感情に対して、事実を当て嵌めて行くというやり方である。そうした方法は根拠がないばかりでなく、その結果は不明確な資料によって作り上げられた詩人像、単純化、神秘化なのである。

今度はここで、エミリ・ディキンソンの間違ったイメージを作るにあずかった二つの小説について簡単に述べておきたい。まずマクグレゴア・ジェンキンズの『エミリ』は、彼自身の郷愁に満ちた伝記『エミリ・ディキンソン——友人で隣人』の小説版である。それは、伝記同様、ディキンソンを感情や感覚が掴みにくい世間離れした人物として捉えている。しかも小説の中で、彼は家族の年譜に関する日付を勝手に作り変えてしまっている。彼は、彼女の人生と経験に対して、決定的な影響をあたえた背景や支柱となるような人物や事件を、想像で勝手に付け加えている。<sup>15</sup>

次なる小説の『エデンよ、ゆっくり来よ』においてローラ・ベネットは伝記を書いているのではなく、「自分が想像した虚構のシーンやエピソードを書いたのであるが、そのことで登場人物たちの個性を歪める気持ちはない」<sup>16</sup>と謙虚に認めている。彼女はジェンキンズよりも真実性をより尊重しようとしているが、ロマンス物の雑誌に掲載されても遜色がないようなメロドラマ的ラヴ・ストーリィを作り出すのに腐心している。少女のディキンソンは美人で、活発で、お茶目で、万能で、友達や従姉妹たちにくらべても遜色のない素晴らしい少女として描かれている。彼女はまた親切で同情心もある。そして彼女は周囲の者たちに、息をもつかせぬ深みのある言葉で話しかけるのである。年長の者たちは彼女の鋭い観察力に魅了され、彼女のおきゃんないたずらにびっくりしては喜ぶ。「彼女の頭をぶて」という詩が朗読される。すると、彼女は頭をもたげて、さも意気揚々として退場するというわけである。若者たちはみんな彼女にのぼせている。そして、劇の半ばに入ったところで、彼女は男性にキスを許し、かくして二人の男性が結婚を申し込む。

若さにまかせたこうした奔放な恋愛遊戯は、ディキンソンが1854年にフィラデルフィアでワズワース牧師に会うことで終わりを告げる。彼女は一目惚れで恋に落ち

る。彼の方も彼女と恋に落ちるが、既婚者だったので、両方とも心から苦悩する。彼らの会うシーンは涙と、魂が求め合う愛の叫びで満たされる。彼らの最後の出会いは、感極まった別れのシーンで、古典的な失恋物語である。

彼女の涙を見て、彼は立ち上がり、その前に立った。それから突然、彼女を支え、ひしとかき抱いて、お互い唇を合わせた。「貴女を自分のものにしたい」と彼は情熱的に囁いた…。

そして彼は振り向いて、心も千々に乱れて、懇願するかのように彼女の方をみやった。エミリは、自分の身体の神経も腱も張り裂けそうに感じた。その瞬間、もし彼女の心臓からぜんぶの血が流れ出たとしても、彼女は驚かなかったことであろう。

「ああ」と彼女は心が飢えて叫んだ。「黙って！でも、あの一言だけでもう一度おっしゃってください。私だけに。一言！それを聞いたら、私は死にます」「いいえ。貴女には何も起こりません。」彼は苦悶のうちに叫んだ…。

エミリは再び意識を取り戻した。「もしできることでしたら」と彼女は答えながら息をした。「でも、貴方は他の方のものです。貴方の奥様のものです。もし、私が奥様の立場に置かれていたとしたら、どうなりましょうか」

「それは分かります」彼は呻いた。「でも、貴方と私とは心の中では一つです。」彼女は彼の顔をわが胸にひしと抱くと、その胸は刺し貫かれたかのようにどくどくと鼓動した。<sup>17</sup>

小説の中の人物たちの行動は誇張され過ぎているので、性格や動機付けについては信頼がおけない。ローラ・ベネットは、大衆受けのする形式にディキンソンの人生を無理矢理に当てはめようとしたのであろう。人物の名、日付、実際の事件について忠実ではあるが、ベネットの小説はエミリのイメージをロマンティックなヒロインのイメージに無理やりに当てはめようとする明白な意図によって損なわれている。大衆向けの文学や初期の伝記に反映された神秘的なエミリ・ディキンソンは、その後もずっと続いて来た。しかし、1939年以来、つまり最初の権威ある伝記であるジョージ・ウィッチャーの『これこそが詩人だった』の出版以来、現実の女性、現実の詩人は、神話よりさらに興味深く重要であることを明らかにし出したのであった。

## II アマースト

エミリ・ディキンソンは、マサチューセッツ州アマーストに1830年12月10日に生まれたが、アマーストの人口は当時約3,000人弱で、コネティカット川沿いの小さな農村であった。アマーストは1672年～1729年頃の時期に至るまで、6世代を遡ることのできるカルヴィン主義に根ざした村で、その昔、「法王」と綽名されたソロモン・ストッガードが専制権力を握って、ハンプシャー郡を治めていた。信仰復活運動が結実したような敬虔な感情と、ストッガードの後継となった孫息子ジョナサン・エドワーズの厳しい正統主義のおかげで、当時のコネティカット川流域の小さな村々には厳格なピューリタン文化が育まれていた。

ディキンソンが生まれた頃のアマーストの教会は、大抵は会衆派であって、日曜に2度の礼拝があり、家庭では毎日、聖書を読むことが奨励されていた。説教では、人間の生来の墮落とか信仰告白による入信の大切さとか、死がいつなんどき迫っているかも知れないこと、さらには、神の怒りが強調された。

エミリ・ディキンソンは、最終的に、このようなカルヴィン主義の厳しい教義を受け入れなかったわけだが、教義が真剣に受けとめられた土地柄に生きていた。エミリの死に対する強迫観念（彼女の詩の約3分の1はこの主題を扱っている）と、宗教体験や神に関する多くの詩は、こうした伝統の存在を物語っている。

町の者たちは公共の場での責任、自己規律、それに道徳的感性を敬うべき徳と考えていた。ほとんどの村民たちは自分の裏庭で、自家用として卵、チーズ、塩漬け、肉をまかなった。アマーストの人々は儉約、勤勉、中庸を守り、時間を守って生活していた。アマーストでは楽しみや娯楽に対するピューリタンの態度が一般的であり、男たちは仕事に忙しく、女たちは日々の家事に忙殺され、娯楽や余暇を楽しむ余裕はなかった。1830年頃、近在の大きな町ではトランプ遊びとかダンスとか小説の回し読み等もよく行われていたが、アマーストではむしろ控えられていた。社交らしい社交と言えば、夜に近所の人たち同士を訪問しあったり、ちょっとした夕食会を開くことぐらいであった。年間では、8月のアマースト大学の卒業祝賀会と10月の秋の家畜の共進会ぐらいが主たる社会的な行事であった。しかし、エミリ・ディキンソンの少女時代の単純な生活様式は、1860年代にはより洗練されたものに

道を譲ったが、それはちょうどディキンソンが世間から身を隠した頃に当たる。財力と余暇が増えるにつれて、また外部社会との交流が広がるにつれ、社交上の洗練さを培うことに興味向けられた。ディキンソンの義姉のスーは、ディキンソン家の隣家の邸宅に住んでいたが、変化する時代の一つの輝ける光となった。

町の福音主義的ピューリタニズムは、アマスツ大学が創設された1821年からほぼ1世紀の間変わらずに続き、ハーバード大学を発祥の地として周辺を席卷していたユニテリアニズムに対して正統主義を貫こうとした。ハーバードの異端的宗教の脅威が、マサチューセッツ州西部地方やコネティカット州において懸念されたので、彼らは揺籃期のアマスツ大学を懸命になって応援した。ジョージ・フリズビー・ウィッチャーは、エミリ・ディキンソンとアマスツ大学は多大なものを共有していたと述べている。<sup>18</sup>祖父のサミュエル・ファウラー・ディキンソンはアマスツ大学の活動的な創設者の一人であったし、ディキンソンの父と兄は大学の財務理事を合計して60年も務めたのである。しかし、こうした事実を含めて、大学と詩人はピューリタンの正統派の雰囲気の中で生まれ、育まれたのであるが、彼らを取り巻くより広い外部の世界のことを理解し、経験してみようという欲求の下に、次第に自由な精神を発展させて行き、それまでの伝統と信仰に背を向けることとなった。

### III 家族の肖像

エミリ・ディキンソン家は、17世紀ニューイングランドのピューリタンの先祖から数えて、8代目に当たる。彼女が生まれ、人生の大部分を過ごした赤煉瓦の館は、ディキンソンの祖父が誇りを持って建てたもので、ディキンソン家の実力の記念碑的象徴として建っていた。家庭は父の確固とした指導の下、安定し秩序立ったものであった。繁盛した弁護士として、父親は一生の間、数多くの責任ある役職に就いて社会に貢献した。父はほぼ40年にわたって、アマスツ大学の財務理事であったし、州議会議員を何期にもわたって務め、国会議員を一期務め上げた。父は地域の重要な計画に数多く関わり、アマスツに鉄道を誘致することに努力し、聖公会やカトリック教会の設立にも加わり、個人的にも数多くの寄付をした。彼はウィッグ

党系の代議士の模範であり、誰が見ても信頼できる判断を示し、旺盛な行動力を持っていた。

エドワード・ディキンソンが若い頃、将来の妻に宛てて書いた手紙は、彼の人生を特徴づける厳しい義務感で満ち溢れている。「私たちの上に祝福があるように、そして楽しく目覚めよう。私たちは知性を発揮し、勤勉でいよう。徳を発揮し、あらゆる美質を育て、みんなから評価され、尊敬され、愛される者になろう。私たちはお互に友人たちに義務を果たし、また他の人たちにも義務を果たして貰いたいものだね」<sup>19</sup>。彼が人徳や義務について強調しているにもかかわらず、情熱を現すこともなくはなかった。しかし、どちらかと言うと、そちらの方面のエピソードは稀であった。彼が自由闊達であったことを示す二つのエピソードが残されているが、それは彼の常日頃の厳格な行為から逸脱している。1851年9月の午後、彼はバプティスト教会の鐘をかき鳴らしたことがあるが、それは町の人々にこの上もなく美しい夕日を眺めてほしいという理由からであった。また1875年4月に、スリッパを引っかけたままで戸外に走り出たが、それは春の雪の中で、お腹を空かしている小鳥たちに餌をやるためであった。

わが娘エミリに対する愛情は絶大なものであった。ウィッチャーが記しているように、「彼の神々が娘にとっても神々」<sup>20</sup>であった。子供時代、エミリは畏敬の念で父の前に立ったし、彼女は一人前の女性に成長した後も、父の意志を押し量って行動した。そして1874年6月の父の死が、彼女の隠遁をついに完成させてしまった。7月にヒギンソンに宛てて書いている。「父の心は純粹にして、怖いばかりでした。そのような心が他にも存在しているなんて信じられません」<sup>21</sup>と。エミリ・ディキンソンの母は存在感がなかった。すげない言い方で、ヒギンソン大佐に告げているが、「私には母というものは存在しませんでした。私は、母というものは何か困ったときには、急いでそこに避難できる人のことのように思えますが、そんな意味では母は存在しませんでした」<sup>22</sup>と。

エミリ・ノークロスは、ニュー・ヘブンの花嫁学校に通った。彼女は従順で優しい女性であり、本能的にエドワード・ディキンソンのようなたくましい男らしさに惹かれた。そして二人は1828年5月7日に結婚した。彼女は夫に尽くし、仕え、先々きちんとした家庭を形成する良妻になるという自分の役割を理解していた。夫の死

後1年目に夫人は身体に麻痺を生じ、7年間病臥したが、その間、娘のエミリが主として面倒を見た。そして、この頃になってようやく、娘は母のことを受け入れ、愛おしむようになった。<sup>23</sup>

エミリは、1829年4月16日に生まれた兄のオースティンと格別仲がよく、気持ちが通じ合っていたが、気質的には随分違っていた。父親の重厚で堅実な性格の代わりに、オースティンはユーモア心に富み、はっきりとした物言いをし、また美や芸術を愛好した。当初、西部の都市へ行って活躍したいとする若者らしい熱意があったが、父のアマーストの地に残って自分の跡を継いでくれるようにとの説得に結局折れてしまった。オースティンはアマースト大学の学部とハーバード大学法学校を卒業後、父親の法律事務所付きの弁護士となり、ディキンソン屋敷の隣に移り住み、その後、大学の財務理事として父親の跡を継いだ。彼のエネルギーは父親と似て、地域振興のために向けられた。彼は村の改良事業協会を組織し、銀行や公共施設を創設運営し、新しい教会の建設を指揮し、20年にわたって町の様々な寄り合いや会合で取りまとめの役を演じた。

オースティンの妻となったスーザン・ギルバートは、エミリのアマースト・アカデミーでの同級生だった。彼女は知性があり俊敏であった。そして、自分が主宰した豪華な晩餐会で、社交的会話を大いに楽しんだ。彼女のパーティは活気に満ちていて、いつも有名人たちが集まった。お客の一人は、彼女の輝く魅力の下に潜む特徴について、次のような肖像を書き残しているが、それは彼女の性格の複雑さの一端に触れるものである。

町の社交界のリーダーはオースティン・ディキンソン夫人で、才気走り、趣味がよく、洗練された、高い教養を持った女性で、社交界での高い地位に色気を示すものの、最良の意味において世間的に通りのよい女性で、良いものとすばらしいものを鋭く正しく見抜く眼力の持ち主である。彼女の想像力は極めて鮮やかで、ときには、あまりに鮮やか過ぎるので、彼女の言っていることは現実を通り過ぎて、描写する絵が美しすぎることもある。もし彼女に小説を書かせてみたら、ロマンスや冒険の書き手として、セルヴァンテスにも匹敵したはずである…。ディキンソン夫人は、おそらくピューリタンの血統だと思われるが、彼女の精神のありようからすると、さほどピューリタンのとは言えない。<sup>24</sup>

エミリは、スーのことを、多年にわたって義姉としてまた信頼できる友達として受け入れ、彼女に300編もの詩を送った。しかし、スーはエミリの信頼を裏切って、その詩の中から1編を1866年の『スプリングフィールド・リパブリカン』紙に掲載した。二人の間にできた亀裂は、お互いの相違点を明らかにし、彼らは次第に疎遠な仲となり、表面的なお付き合いの関係となった。

エミリの妹のラヴィニアは、1833年2月28日に生まれたが、彼女は積極的かつ現実的な女性で、行動は直裁、齒に衣着せることのない女性だった。姉のエミリのような精神的な危機意識も体験せず、想像力もなかったヴィニーは、結局、結婚せず、家に留まり、家事万端を取り仕切った。姉のエミリに忠実を尽くし、そのプライバシーを守ってやると同時に、秘密を共有した。エミリが死ぬと、ヴィニーは、残された手紙類を焼却するようにとの依頼を実行しようとしている最中に、手書きの詩集の原稿の束を多数発見した。そして、彼女の尊敬措くあたわざる姉が書き残した詩への信念黙しがたく、最終的に詩集の出版に漕ぎ着けたというわけである。

#### IV 友達とほのかな情愛

エミリ・ディキンソンが、アマーフト・アカデミーに通学していた頃、彼女には何人かの仲良しグループがいたが、特にアバイア・ルート、アビィ・ウッド、ジェイン・ハンフリーと仲がよかった。これらの友情はしっかりとしたものになり、お互い頻繁に文通をしあったが、そのうち、結婚したり、アマーフトを離れたりしたりして、関係は自然に途絶えてしまった。アカデミーにおける最終学年の頃、ディキンソンは若い校長のレナード・ハンフリーの影響を受けた。ハンフリーはアマーフト大学卒業時に卒業生総代を務め、兄オースティンの友人で、オースティンと同じフラターニティの会員であった。おそらく、ハンフリーの方はエミリのことを、単に頭の良い生徒ぐらいにしか思っていなかったのだろうが、1850年に彼が突然病没死した後のディキンソンの言葉を見ると、彼女は彼のことを偶像化していて、彼のことを最初の「マスター」の一人にしている。アバイア・ルートにエミリは書いている。

私が、今晚、アバイアに書いているのは空気が冷たくて、静かだから。そして私は忙しかった一日の雑用と、あれこれ気を使ったことを忘れることができるから。それに私は「利己的」なのよね。だって私は淋しさを感じているから。私の友達の何人かは、ここを去ってしまった。私の友だちのうち幾人かは眠っている。教会の庭の土の中に眠っている。夕暮時は悲しい。夕暮れ時は私のお勉強の時間だった。私の主人は逝ってしまわれ、休んでおられる。そして本は頁が開かれていて、教室には生徒がただ一人ぼっち。涙が出て来る。そして、それを手で払うことすらできない。もし涙を払うことができたとしても、私は払わない。なぜって、それだけが、私がここを去ってしまわれたハンフリー先生にしてあげられる供養だから。

これまで、あなただってお墓の側に立ったことがあるわよね。私はお墓を夏の甘美な夕べに散歩したことがある。そして、石の墓の刻まれた名前を読んでみた。そして、私が死んだら誰かがやって来て、同じことをしてくれるのかと思ったりした。私はまだ一度も友達を埋葬したことがないけれど、友達もまた死ぬのだということは忘れなかった。これは、私の最初の心の痛みだった。そして、これは本当に耐え難いことだったわ。(L, I, 102-103)

エミリがマウント・ホリヨーク女学院に在籍していた頃、27歳のベンジャミン・ニュートンが、自分の故郷のウスターの町で自分の事務所を開く前に、エミリの父の法律事務所で二年間の実習を受けるため、アマーストに到着した。ニュートンはユニテリアンで、若干進歩主義的思想を持っており、明らかに現代文学のことをよく知っていた。エミリとの友情が発展して行くと、彼は彼女がそれまでに知らなかった思想や文学の世界に触れさせてやった。当時の伝統に沿って、彼はリディア・チャイルドの社会的に過激な本である『ニューヨークからの手紙』を貸しあたえた。しかし、彼からの最も重要な贈物はラルフ・エマスの一冊の詩集であった。この詩集とエマスのその後に書いた書き物から、彼女はその思想を得たが、それらは自恃という自由精神とか、伝統よりも個人的経験を重んじること、詩人は「見者」であるという考え方であった。そしてこうしたことのすべては、彼女の詩人として生きて行きたいという希望を刺激し、その後、彼女が選ぶこととなった厳しく孤独の生活を支え、励ましてくれたのである。

ニュートンさんは、父のところに2年ほどおられました。その後、ウスターに移られました。お仕事に熱心な方で、私たちの家族も同然の方でした。

私はそのとき、ほんの子供に過ぎませんでした。しかし、私は、私自身の知性をはるかに凌ぐその

方の力とか優美さをあがめていました。それは私に多くの教訓を教えてくださいましたが、そのことについては謙虚にありがたかったと思っています。今や、それも失われてしまいました。ニュートンさんは、私にとっては優しいが、重々しい先生で、私に何を読むべきか、どういう作家を賞賛すべきか、自然の中で何が最も偉大で美しいかを教えてくださいました。そして、何よりも崇高な教訓を教えてくださいましたが、それは見えないものに対する信仰、そしてさらに高尚でさらに祝福されている生というものへの信仰でした。

これらのことについて、彼は話してくれました。それらすべてのことについて、教えてくださいました。真剣に、そして優しく。そして、彼が私たちのところから去ってしまったときに、それはお兄さんとしてでありましたし、本当に敬愛し、心から痛ましく思い出すことでした。(L, I, 282)

ニュートンに対する彼女の賛美と愛情はこの手紙から明らかだが、ロマンティックな感情らしいものは欠けている。ニュートンは早い頃の主、あるいは彼女言うところの「先生」(“Preceptor”)であった。そして、彼は彼女が詩人としての素質を持っていると認めてくれた数少ない人たちの一人であった。彼女の早い頃の友人として立ち現れる他の若者たちの中には、兄の級友だったジョージ・グルドがいるが、彼は学校新聞の編集者として、ディキンソンの最も早い散文詩であるヴァレンタインの詩を掲載してくれた。父の法律事務所に関係していたエルブリッジ・ボードインには、一度本を貸してくれたというので、ディキンソンはお礼に擬英雄詩風のヴァレンタイン詩を送ったりした。アマースト大生のヘンリー・エモンズとは、ディキンソンは遠出に出かけたり、花や本をお互いにやり取りしたりした。こうした友情はどうやらエミリ・ディキンソンにとって愉快で楽しい交遊のようであって、恋焦がれるとか秘められた恋というには、精神的な緊張や不安に欠けている。

## V 生育歴

エミリの幼少期は、彼女の時代の同じ社会階級の多くのニューイングランド地方の少女たちの幼少期とさほど異なったものではない。彼女は19世紀アメリカ女性の理想像に共通の、礼儀正しさ、徳、能力を持ち合わせるようにと育てられた。彼女の両親は、彼女が良いキリスト教徒になり、家事に勤しみ、限られた中ながら文化や教育を楽しみ、いつの日か、自分の夫に尽くす女性になることを願った。しかし、

後に述べるように、彼女の魂の独自性が、後年になって、周囲からの彼女への期待を損なうものとなった。エミリが偉大な芸術の道を進むことに身を捧げることを選んだとき、彼女は時代の精神と社会のステレオタイプのイメージに挑戦し、それを拒絶したのである。

彼女は若い頃、ピアノの演奏を学んだ。そして、父の言い方によると、心を「揺さぶる」ことのないような本を読むことを許された。彼女の教育は、当時の普通のアメリカ人が受けたものより優れたものであったが、当時の男性たちにあたえられた教育ほど優れたものではなかった。というのも、彼女たちの教育は、妻としての役割を準備するようにと意図されていたからである。1840年から1847年に、彼女がアマースト・アカデミーに規則正しく通ったとき（時々、病気にかかって欠席したこともあったが）、彼女はラテン語、ドイツ語、フランス語、生物学、地質学、歴史、哲学それに作文等を学んだ。彼女は手のかからない良い学生で、先生たちが大好きで、また先生たちからも好かれていた。彼女は頭の回転の速さとか誠実とかによって、同級生たちから好かれたので、幾人かの仲良しグループの女性たちの結束は強まり、長い間にわたって手紙をやり取りした。

彼女の正規の教育の最後の年は、マウント・ホリヨーク女子学院で過ごされたが、そこではメアリ・ライアン女史とって、女子教育の草分け的な第一人者が校長をしていた。学校は知的な訓育のみならず、生徒の宗教的な行動の厳しい監督によって世評が高かった。そして、エミリは深刻な宗教的危機に見舞われた。秋学期、彼女はまだキリスト者として信仰の告白をしていなかった特別グループの会や、悔い改めをしない者たちへの呪いを強調するセミナーや講義に出させられた。彼女は深く考え、魂の中をまさぐり、懊悩した。しかし、最終的に信仰告白をしないことに決めた。その理由は定かではないが、友達のアバイア・ルートへの手紙で分かるように、彼女はキリスト者になれなかったことへの無念さを述べて、「私は世間事を諦めることが難しいのです」と胸中を訴えている。(L, I, 67)

従って、エミリは、大人への一步をキリスト者の良心や心根とともに始めたわけだが、しかし、他のキリスト信者たちが人生の苦悩や複雑さに直面したとき、支えとした信仰と希望を持っていなかった。「世間事を諦めること」を拒否することで、逆説的ながら、彼女は自分を取り巻く世界から身を引いたことになる。そして、彼

ポール・ファラッゾー『エミリー・ディキンソン』

女は結局、詩を創作することに本分を見いだし、違う世界を探求する旅に出たのである。

(原註)

第1章

1. Martha Dickinson Bianchi, *The Single Hound* (Boston, 1914), p. xviii.
2. Martha Dickinson Bianchi, *The Life and Letters of Emily Dickinson* (Boston, 1932), pp.43-51.
3. Josephine Pollitt, *Emily Dickinson: The Human Background of Her Poetry* (New York, 1930), pp.119-56.
4. Genevieve Taggard, *The Life and Mind of Emily Dickinson* (New York, 1920), pp. 91ff.
5. MacGregor Jenkins, *Emily Dickinson: Friend and Neighbor* (Boston, 1930).
6. Susan Glaspell, *Alison's House: A Play in Three Acts* (New York, 1930), p.25.
7. Ibid., p.139.
8. Ibid., p.5.
9. In *The Burns Mantle Best Plays of 1947-48*, ed. John Chapman (New York, 1948), p.247.
10. Ibid., p.261.
11. Ibid., p.258.
12. George Frisbie Whicher, *This Was a Poet: A Critical Biography of Emily Dickinson* (New York, 1939), p.101.
13. Norman Rosten, *Come Slowly Eden* (New York, 1942), p.ix.
14. Ibid., p.14.
15. MacGregor Jenkins, *Emily* (Indianapolis, 1930), p.7.
16. Laura Benet, *Come Slowly Eden* (New York, 1942), p.ix.
17. Ibid., pp.263-64.
18. Whicher, pp.20-21.
19. Jay Leyda, *The Years and Hours of Emily Dickinson* (New Haven, 1960), I, 4.
20. Whicher, p.27.
21. *The Letters of Emily Dickinson*, ed. Thomas H. Johnson and Theodora Ward (Cambridge, Mass., 1958). All selections from the letters of Emily Dickinson are

drawn from this edition, and will be indicated in the text by the capital letter *L*, followed by the volume and pages of the reference, enclosed in parentheses as in (*L*, II, 528).

22. Leyda, II. 152.

23. See affectionate references to her mother in *L*, III, 746, 754, and 771.

24. Quoted in Whicher, p.34.

### Selected Bibliography

#### Primary Sources

##### Poetry (arranged chronologically)

*Poems by Emily Dickinson*. Edited by Mabel Loomis Todd and T. W. Higginson. Boston: Roberts Brothers, 1890.

*The Poems of Emily Dickinson*. Edited by Martha Dickinson Bianchi and Alfred Leete Hampson. Boston: Little Brown, 1937.

*Bolts of Melody. New Poems of Emily Dickinson*. Edited by Mabel Loomis Todd and Millicent Todd Bingham. New York: Harper, 1945.

*The Poems of Emily Dickinson, Including Variant Readings Critically Compared With All Known Manuscripts*. Edited by Thomas H. Johnson. 3 vols. Cambridge, Mass.: Harvard U. Press, 1955.

*The Complete Poems of Emily Dickinson*. Edited by Thomas H. Johnson. Boston; Little Brown, 1962.

*Final Harvest: Emily Dickinson's Poems*. Edited by Thomas H. Johnson. Boston: Little, Brown, 1962.

##### Letters (arranged chronologically)

*Letters of Emily Dickinson, New and Enlarged Edition*. Edited by Mabel Loomis Todd. New York: Harper, 1931.

*The Letters of Emily Dickinson*. Edited by Thomas H. Johnson and Theodora Ward. 3 vols. Cambridge, Mass. Harvard U. Press, 1958.

## Secondary Sources

### Bibliography and Concordance.

- Rosenbaum, S. P. *A Concordance to the Poems of Emily Dickinson*. Ithaca, N.Y.: Cornell U. Press, 1964. Computer concordance based on Johnson's 1955 *Poems*.
- Woodress, James. "Emily Dickinson." In *Fifteen American Authors Before 1900: Bibliographic Essays on Research and Criticism*, edited by Robert A. Lees and Earl N. Habert, pp.139-68. Madison: University of Wisconsin Press, 1971.

### Biographical Works

- Bianchi, Martha Dickinson. *Emily Dickinson Face to Face: Unpublished Letters with Notes and Reminiscences*. Boston: Houghton Mifflin, 1932.
- . *The Life and Letters of Emily Dickinson*. Boston: Houghton Mifflin, 1924.
- Bingham, Millicent Todd. *Emily Dickinson: A Revelation*. New York: Harper and Brothers, 1954.
- . *Emily Dickinson's Home: Letters of Edward Dickinson and His Family with Documentation and Comment*. New York: Harper and Brothers, 1955.
- Habegger, Alfred. *My Wars Are Laid away in Books: The Life of Emily Dickinson*. New York: Random House, 2001.
- Higgins, David. *Portrait of Emily Dickinson: The Poet and Her Prose*. New Brunswick, N.J.: Rutgers U. Press, 1967.
- Jenkins, MacGregore. *Emily Dickinson: Friend and Neighbor*. Boston: Little, Brown, 1939.
- Johnson, Thomas H. *Emily Dickinson: An Interpretive Biography*. Cambridge, Mass. Harvard U. Press, 1955.
- Leyda, Jay. *The Years and Hours of Emily Dickinson*. New Haven: Yale U. Press, 1960.
- Pollitt, Josephine. *Emily Dickinson: The Human Background of her Poetry*. New York: Haper, 1930.
- Sewall, Richard B. *The Life of Emily Dickinson*. 2 vols. New York. Farrar, Straus and Giroux, 1974.
- Taggard, Genevieve. *The Life and Mind of Emily Dickinson*. New York: Alfred A. Knopf, 1930.
- Whicher, George Frisbie. *This Was a Poet: A Critical Biography of Emily Dickinson*. New York. Charles Scribner's Sons, 1939

Wolff, Cythia Griffin. *Emily Dickinson*. New York. Addison-Wesley Publishing Co., 1988.

#### Critical and Interpretative Books

Anderson, Charles R. *Emily Dickinson's Poetry: Stairway of Surprise*. New York: Holt, Rinehart and Winston, 1960.

Bingham, Millicent Todd. *Ancestors' Brocades: The Literary Debut of Emily Dickinson*. New York: Harper and Brothers, 1945.

Capps, Jack L. *Emily Dickinson's Reading 1836-1886*.

Cody, John. *After Great Pain: The Inner Life of Emily Dickinson*. Cambridge, Mass.: Harvard U. Press, 1971.

Franklin, R. W. *The Editing of Emily Dickinson: A Reconsideration*. Madison: University of Wisconsin Press, 1967.

Gelpi, Albert J. *Emily Dickinson: The Mind of the Poet*. Cambridge, Mass. Harvard U. Press, 1965.

Griffith, Clark. *The Long Shadow: Emily Dickinson's Tragic Poetry*. Princeton, N. J.: Princeton U. Press, 1964.

Kher, Inder Nath. *The Landscape of Absence: Emily Dickinson's Poetry*. New Haven: Yale U. Press, 1974.

Miller, Ruth. *The Poetry of Emily Dickinson*. Middletown, Conn.: Wesleyan U. Press, 1968.

Porter, David T. *The Art of Emily Dickinson's Early Poetry*. Cambridge, Mass.: Harvard U. Press, 1966.

#### Critical and Interpretative Articles and Essays.

Higginson, Thomas Wentworth. "Emily Dickinson's Letters." *Atlantic Monthly* 68 (October, 1891), pp.444-56.

Tate, Allen. "Emily Dickinson." In *Collected Essays*. Denver: Sewall Press, 1959, pp.197-211.

Waggoner, Hyatt H. "Emily Dickinson: The Transcendent Self." *Criticism* 7 (Fall, 1965), pp.297-334.